浪華使夫傳

六

特
へ遠13
966
6

遠門 18
特 966
巻 6

本清

浪花俠夫傳巻之四

遠州佐夜中山林鹿栗杖亘兒卯述

根津四郎右衛門女盗賊捕る話

扨も根津四郎右衛門ハ女郎ちくふ一大事と教をもらをる使客あれを火ふ入とも詮義ちぬうんと思ひ定るく翌日爰元居ていも今さ七つ頃より大坂と立出るくらゞう峠へさしつゝもらる先云郎ゞ村方ふくゝ云郎ゞ事を吹合をよさいつらゞ盗賊の為ふ教されーと唱あう者れを扨ハ扨谷ゞ所意ゞ相遂おーと大和へ立越金法ゝ詮義せんと雖ゝて夜の更る沢ゝ峠へ出かゝりる者ゝふ運命ふ懐火あゝる幽霊の姿法の如くゝ男の黒首と投出せバロより火縄と吹りゝ出ゝ

[illegible]といふて鉄砲[illegible]依りこの幽霊ハ仕掛しなるべ
く[illegible]なるべく鉄砲なるが懸へ手と[illegible]なし今殺へ手段ひとしなく取て
押へ戦あるとみなく後手よりなるべ小[illegible]先己何事あれを
此海道なるべくかるるまいとなんと怒りられバ女房なるべくと流
何をなる隠しなるべく自を河内の盲人幸助といふもの女房なるべく夫の病
気人参代よりはまりなる此ふいなるしなるべ
でなる鉄砲なるべくと笑ひ其幸助ハ生来月盗賊のなる殺され其女
房ハ曽根崎新地なるべく勤奉公とし今の名ハなるべくなるし先達
其のまふくたなる金子一両なるべ其返報よ来るなるべ
さるべく板谷伊兵衛なる日数の者あるべし来る白状なるべ命斗ハ
なるて是んと墨をさしなる訪よ女房よ驚き最早逃れ難し

とや思ひなんよ叫んなる何事も皆あるべ是程あれくと
よて其後ハ物ともいふなるべ[illegible]なるべ其ひとなる
びたるべ己白状なるべ板谷伊兵衛が方へ連込面談なるべ
いふ事あるべなるとなる人の樹よりなる付なる我身も名よ腰打なるて
夜の明るなるを待なる此時手下のその未だ女房ふ力を
流んなるべなるべ最早女房いなるべ何事もあるべ
呼ひしなるべ驚き息をなるべよ簾へ入れ板谷伊兵衛なる
なるをなるハ一大なるべ夜明来捕手の者来るべ
あるなるも我身ふいなるべなるべ金子なるべ懐中なるべ何
なるなる盗なる下の者なるも怪
なる[illegible]なる暫時よ明夜なるを教なるべ

この女を引つれて大和へ来て扨谷伊兵衛に敵早国遠ちく切来る
事度迫取へ来る事此如くありたりやと疑られを近所の者ども
敬畏さこれを扨谷伊兵衛との、四室なり 俗家くいあ めめ人と疑
られべきもべ〜ちくようさ手ひろうと扨ろうと又引き大坂へ〜ちく吸りる

扨谷伊兵衛剣と賣ちく掌と沙る話

扨も扨谷伊兵衛ハくらがりと咲ちく女房小菱捕ら出〜と笑ちう元
物を取あく度大和と立退伊国と高とハなりれども足ふ伊ちどち東
国さ〜ち下ちるが事急ふ立退ちるゆへ取人貸付金し金あ〜ちる
立ち写なく路利迫も公ふ伊せ度不自由なるく金ふ入ちる〜ちと出
鎌倉と志さ〜落ちる是ハ扨亜縁倉ふへ将軍家刀剣と好ちひ

さくの名剣と鈍ドちる三浦の前司泰村ちと出羽守一の人あれ
を何卒名剣伝鈍上せたやと公ふ伊ちよ吹し牛尾左膳ち
情嘱あるちれば牛尾も鈍剣を見出し殿の御機嫌ふ入ちん〜
心掛ちる扨谷伊兵衛ハ中ちく鎌倉ふ来ち能事もあ〜んちと色
く聞合せちるふ近頃三浦殿名剣伝求ち給ふ〜ふの中ちく先
達ち兵助方ちく盗ち〜牛王吉光の刀と大金ちく賣〜んや
傳手と求ん牛尾左膳方へ来ち玄知ふ案内ちく入ちるハ其ハ
上方の浪人者ふ伝ちが関東ふ仕官の色ふ系譜上ふ略見ふ
好宜ふ宝ハ身のさ〜合と中ちんるれバ重代の剣と賣松ハ
公ちけ〜処太ち頃日剣と求めぬ人ち〜兼ちい何卒ち落ふ備
へ御公ふ吹ひ代ち〜ハ度ち〜ち宜ふ吹拳教ちと

慇懃の詞入るる牛尾は勲さく心掛し夏あるべ名劔と変て大ひ
拔び早速立出く對面とろよ見ろうる男し牛尾詞をこの上其え
は竜造寺の家中伯父の板谷刑部の子息あるとや伊兵衛も大ひよ
驚き老君は板谷軍兵衛殿ふのあ〜ぞやこそくいふとあさまるる
事よ無の松怪び牛尾言々るは其元國遠あるし後我も武士英繼うて
國城を退くく雖家せしが只今くは生駒井一の三浦家よ仕宦し
當時我ふ武士よるるのあり　業云も仕宦のをあ〜べ大らふ吹拳致
とべしと銀よ云られを伴兵衛大ら怒ひ此上足下よ仕せ申弱
何な宜しく者を奪かし拔此劔は牛王吉光の名劔あれども價と
不論何分太守へ差上られまるの義宜さのを奪いひれを
牛尾る怒と思ひ取直れまよ出く私淀身板谷伊兵衛と申者

仕宦のをとろく東國へ武越何家當家へ仕奴あるを以君は許
容も下さるべ此劔秋上いるし　詞をユをふ上とる太ち
劔と取上る為よ滅よ無の出来物の牛王吉光あれば大よ拔ひ張
ひ泄ら浪者とあれば由緒紀をよ及ハ強よ價と論ぜ力と差生を
神妙し奪るべ拔へろ無し　藏を粥は何事ろあ牛尾答へさる
関に流の級どろく仕人太守拔ひのひ早速百五十石よ召抱れ名と
乘田義兵衛と改名馬廻り勝手役仰せ付れ是ようは牛尾諸ろ
ろく悪計なあ〜民とろ〜先れとも天討時多以不義うて
段〜〜富とろは見世をあさ世中なろ

板谷伊兵衛が妻　五兵衛と対る話

夫より久枝谷の女房ハ根津四郎右衛門ふり捨れ大坂へ素り給ひ
下ゝく流ぐさるゆゑあゝ後ハ早速安人召人ハ指出し給ハ太守
四郎右衛門を召されて委細ゆゑ尋めい口ゝ実意且強男ハ
称し給ひ女とさゝく拷問あり給れを初の程ハ詐ざり給れども次第
ゆ厳敷拷問ゆ合て夫ゝ悪事刀ハ盗ゝ云助ゝ殺せし事をも白
状ゆ及れば大切の罪人なりと厳敷入牢仰付られ枝谷伊之衛
門姦ハ近国迫出追放あり給れども枝谷知り給ふ友ゆ
守五之衛と云者生れ付く好色なるものゆて枝谷が女房の色白
く三十斗ゆ油づさるゆ公ゝつゝの銀をもちいなとを度ゆ
れ詐ひ給れば女房ハ恐しさ為めあれい紙謀ゝ有と五之衛と
ゝ度眼中ゆ情ハ合心あゝゝゆ多ゆ給れば五之衛ハ渡ゝゆ船

く人ゝ指ゆいひ給けるをゝあゝハ給ゝ謀ゆなり給れども情
ゝく迫しゝひ給れ指をあゝ逢べしと別を給れ夫ゝ又来
ゝゆくゝふゝとゝらしはし宰ゆ入べ居給ゝぬゝびと婚く枝蜜ゆ枝
ゝ夜毎ゆ彼女房をこゝ為くさゝ色好淫ゝ給ゝを二月余り誰
あゝものをなく夜毎ゆ宰屋の側ゝゝひ給ゝ或夜雨風烈ゝく物を
ゝ敷しく指ゆ女房いひ給ハゝゝ青ハ雨風をげし給れば夜ゝ給ゝ
及ぶゝゝ給ゝゝハ酒をふゝく和ゝゝ作ゝんといひ給れをゝ給ゝ五之衛酒
とゝ給ゝゝ給ゝ自酒者を調へゆ人聟ゝ事もゆく酒給ハゝ給ゝ
女房ハ勤ゝく心ゝ給ゝ事ゝ又ゝ五之衛ゆ無理言ゝく酒給ゝ為めゝ五之衛
ハ風雨ゆ心ゝ給ゝ枝盃給ゝ事前後ゝゝ給ゝ伏給れをゝ給ゝゝ
あゝゝと見過ゝ五之衛ゝ大小給ゝゝ合羽笠給ゝ冠ゝ枝子木ゝ

浪花侠夫傳卷之四

かくし表門へ出門の日をとざし立出たれども風雨烈しけれど物おと
しづまりて女房は息をひそめ臨りしとうかゞひ何国ともなく落行ける

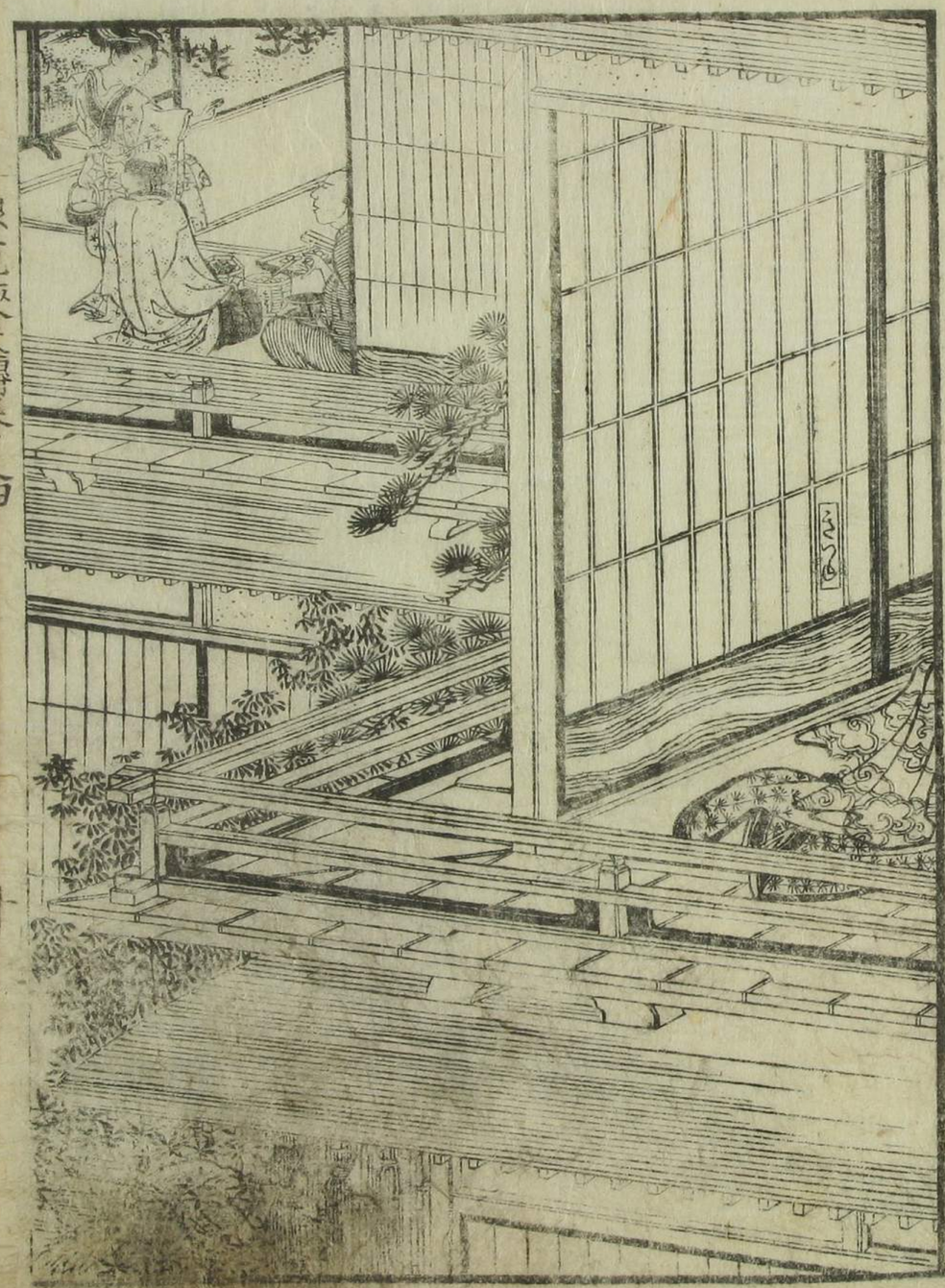
清十郎狐を化を并九郎助狐を助て敵の
通手と狐知る話

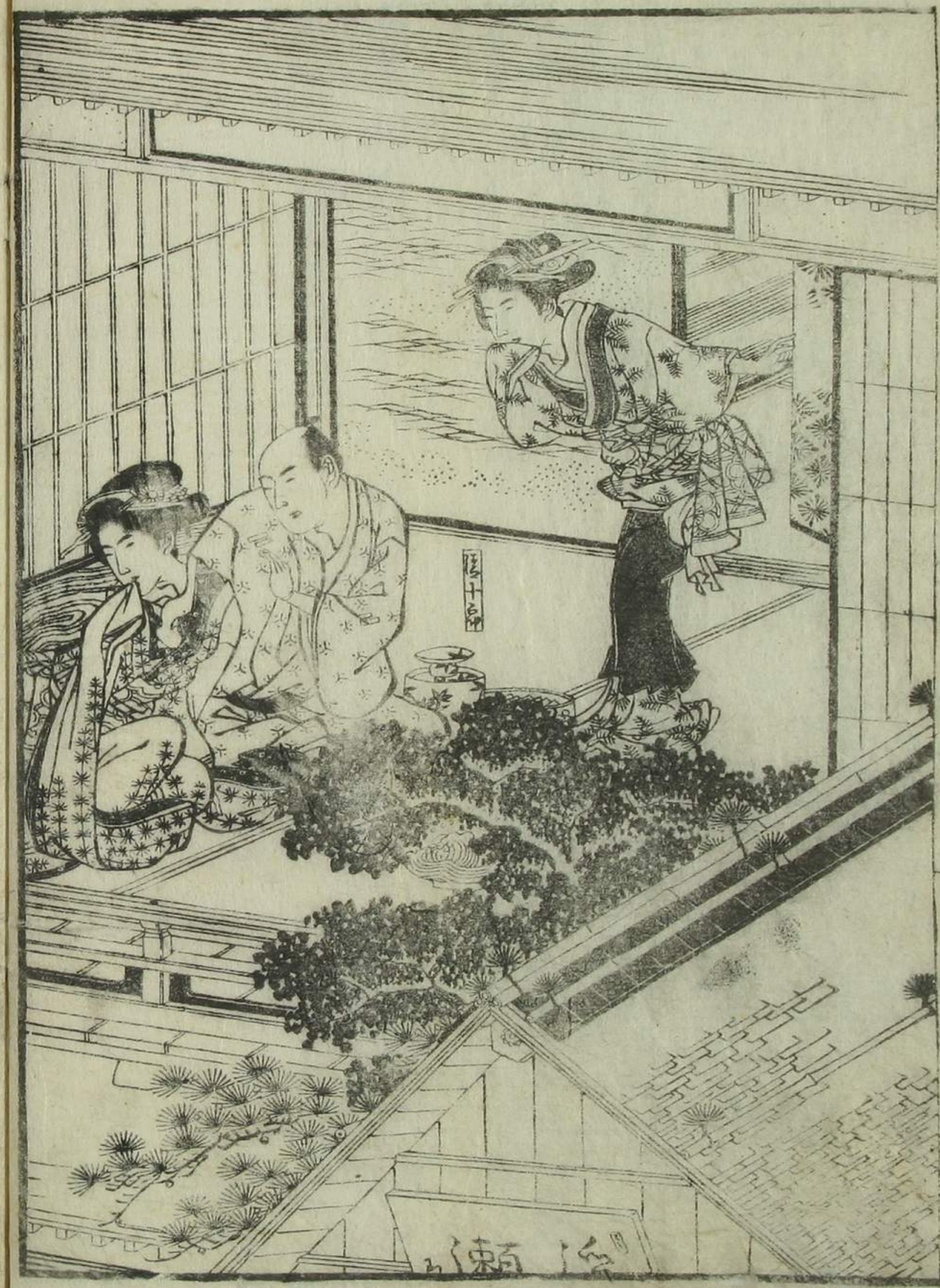
此おくに名堂清十郎はお夏と諸ともに朝比奈茂兵衛方にかくまはれて
またくらが日数を編笠かぶりて敵の有家を尋ねるゆへ住吉の天

王寺と心がけ長町と合邦が辻通りてこれを池乃かたへより狐一疋比く
来りも未だね神あり是れ清十郎あやしく思ひ白昼に
かゝる所に森入るは大猿の狐あり見んと立寄る是娘げくともり
起しけれは狐大に驚き飛起きたるが極めて此者我と娘とぞくさ
るや早かた見されしと池に立より手すがるに藻とうづきたれど
忽ち十六七のうつくしき娘となり不祥なるさま清十郎
八狐また面白事におもひ近くよりて娘は中んとなき旅にかけ
来り伏し身にあらいぶりしさよとたつ様これを狐いともづくしく
我は上町屋敷の娘なるが継母のきびしきにより不埒と投んと
此所まで来りしに頼もしく面を見し池の端に作出して君乃
情けなく正気に我作りあられ何よりもまた速まらく立のさ

うーと濁ふかく取をぐうる清十郎仕をゑしーうとけ咲しーとうけ
たゑをれを嘆くけ公ち甚く思をくん我も浪人ゑく独身あれば俵
ふひくくとうくお世話ヤ亟しー先くーとゑくまうたゑくとえゆし
わふ深酒よ来うさまく料理とをひつけ食ゑくれを孤へかるる孫
者受酒とうーなてををぶへゆれを数盃傾むけあくまで喰ひたすー酢酢の
去くれ清十郎能打と互よ隔てあくびをくひゆるも浮さえうしあくん
いざやほーはをくよ勢ーー伏しくゆ来のことともものくうをせんと枕蒲団を
とうよをくれを伸居さしくを法人去へらなうくく俳ひくく孤を化換ーまーと
ちくちをうへ思くともいくく酒と者をくるゑへ絡くをくやうくんはをくよ
ゆをもいとび伏くるが お浸正鮒なくさゑなれべふんうちきを物ゑへ
ゆをくくをまを清水へくくいづるくうくみの價をあの娘よ涙ーおさゆをくら

あをとうう取べーー押付迎のをの来るべーー我も其内まへ海う来くん
まく婦人いいう迎なくうをも藤さくーのをとをいひ置くを見あるーを帰
をくる浮沈ゑへ日の暮まくゆ藤さーー置ゆれへ始の男もうべ迎
の者も来べいくく起ーて酒の價をゑべとゆう紀ーくれを孤
大よ驚ゆのうとくれべをの男もあべ仲居くゆれへ先くべけゆう五
酒の價へくをーさゑふけ渡ーー置あうーくーなれへけ拂ひをれ
よくいひくれへ孤へあくを暴くく拠へ人間ゑ化をれくくを始くく海
我へ女の事ゆれべ何くて金銀を持へくをうまくをも先の人をうを
のくれくおをひくれくもいやくく先のけ方をくーー女けけ拂あくくく
帰ををくべ是ゑくもけれひ下くべーーをのくくへ孤を今へ泊くを
をくを体をあくーー逃をくんをくを就寝をくをへ孤をくを





なるそや男子も出命くと呼ぶ人ば座きの若者ぐるてんでう
持と拵来う何の苦もなくたくき伏縄ともつて傳て上る事ハ
大よ驚う先坪の男といふも狐ぬべしふつくさ畜生めの所ハ
さ家内なれば度くふうのめよあみてハ商賣のさいうふ有れば
打殺して後日のうせしめよせよと息書く匂うしる狐のたこく
ハ清十郎ハ内うの遅さとうろうるう生ぬの
ぬうくく出命むひふまうしうとのひられを清十郎ハ思ひ
うに生うふうくのゆめく狐どたるしぬひ酒とくべうしが
今ころいきつひ雑煮しつん汝立越りふの酒の價とうひさつひとなを
事てムまうこうひ命茂清ハ方へ帰とられを清ハ思ておうしくふ
若当郷の精義とうひみぐ浦へいくくうれば狐んごくり

狐ハうくの本ふいまし先版ふ打殺さんとする前なれえを来
ハ何ちねこくく捜ふ見られば真をちくくのよし城内向
後のうせしふ当人打殺をなうくいさふ清いくく我
其價ひと流べし狐と清ハうんや真をいさへく價ハるふ狐
ふハ何そ狐を殺さんを清ハ拾ひ金子ハ出し真ふ渡し狐ハ
渡付みぐ清ハ合郷のはを連行滝ハとき殺しけ見ば狐ハ清と
流し我人間ハ化され命とうるべうしふ版ふの清ふて助るうと
生く世くるうし恩報しふ身ふ叶しふあべハせのへけ
ハべくといひられたを清打笑ひ人間ハ化さうるの事方
何こ思ハ報をるゆのうべさうれと我見るゆまうべさあ人報
ハ豊後國の郡中扶谷軍を清とハ者今何國ハあるやるんら

是城まるやいるあや孤暫く目ぬさして居るうるが孤ぬ其故
谷軍を湯といふ人人をあや先立退しゞ今ハ東國よあうちを湯
又曰東國ハ何方よあうや孤頭とうこゝ武孤伸間よ箱根迫と西國
ぬとし箱根よう東と東國の孤とせ〜擬あれが東國の事ハまを
ぐし何ま箱根よう東ふ住居仕るふ相違おしとひうれ〜感花
たあうもあうんゝ恩報しよ軍を湯西國〜出あい心と仕さく我よ
ちをせよといつ方ちやをうれい孤らうん〜とわ乃蓋よ入うる

京田義を湯樫六ゞ手下ぬ生捕樫六う蜜計と
引ひと佑〜

鎌倉三浦の前司泰村梅津家の雑掌倉持左門〜内

直書ぬされし所ぬ方よハあうの名あの雑掌ぬうれなうを
封のまく返されれを大字牛尾をめうれ甚怪〜とのふ牛尾も
大よ思を何ま湯家住んゝ御前を下て京田義を湯よ相後〜
うれバ義を湯うをく鼎一先よ来して倉橋ゞ実不ぬ乃ぬ
ぬをちくゞと家来数多引つ連ようるうを義り生達
う筑紫樫六う供ようるう〜日向与を湯〜いふ手下の者途中うて
足と痛免樫六よれうれうを所ハ夫うう聊よ漂泊〜をあうう
ゞ此度三浦家の京田義を湯上方へのうるとぬをくこあうゞ金銀
と奪ひうんと道中あと先よ附添く天竜川まを来うしゞ
天竜の船渡〜まを荷物所船運ぶ時幸うと沒ぬ紙奪
うけ乃と家来も見つをやを盗賊ようく追うゞ追取まを

れうも手だれの与三郎なるもせび投付打付よせ付け後ふ荷物
残らず奪ひ去れば芦辺に立隠れ居りて来ども大ふ驚き怪し
よ変よと思ふうち芦の中より声高く盗賊と石捕へよ心易られ
と立出る者と見れば女の嘶れたりの小脇よ引付とつづくかのうち後と
ゆめ立出るべき様なく恐れ女の強勇と感じ二人為三郎が前へ出
引きまくりる為三郎駕ようと立出る山女城と見れば女房小萩と大ふ驚き
けれども人目あれば態と高ぬ袖あるを八女房も夫伊三郎城へ大よ
仰天して直よ高ぬ所へ為三郎付と引立女もろともに浦松の宿
へ来り天竜の中へ城ふ見られぬ所へ為三郎と盗芦の中へ
逃のしみ思ひ付き女よ諸足とあるを怪しと思ふ為三郎
又無来ども女城復讐と思ひ夫の行衛を探るものあるが嚴しく

暫芦の中へ伏うるよ盗賊よく呼りの声み目を覚しところへ此者
馳廻の女石捕もしやれば女よ似合ふ見なりと捕吳しさて
ら三郎城捕間去られば初の役人を八ふ嚴しく向へれ竜紫權
六八手下へ三浦家へ行へ足と痛へ陸れるよう白状
あれば叔八倉橋左門と云へ雑掌八筑紫權六と云へ盗賊なりと
初へ見と為る嚴しく問へ先置夜更人静まるへ蜜よ女房小萩
み逢ふうと此下へ石へ見しと呼へつがいへして助ふ此所へ来ふ
ふ者と為ふ見と八女房八番人の陸平何ひ按出夫の行衛へ
不思議ふ廻へ逢いへる事の嬉しさへ悦ひ涙よ見へ枝谷へ
女房が志さしを喜び去へ上方へ連行んの為へ一先孫倉へ
送て参八我帰て城復讐へ五日家来先城へ駕へ孫倉へ

送つ来り扨ちそ湯とを石連上京しく公へ川渡し筑紫權六義金
子三千両衛ろし　きれき後へくれば召る驚のひ人想書どいく借用く
解のよ京田茂之湯ハ梅津家経営へ立入金銀とるつく偽りの
堀姫あつし事公儀ハ中将屋も當時勢ひ成盛んの三浦家
なり殊よ多くの金銀とひのひ志ね迫よ振しのひる是全
京田ゞ所智より出し事なりり

関金助筑紫權六と名乗る話

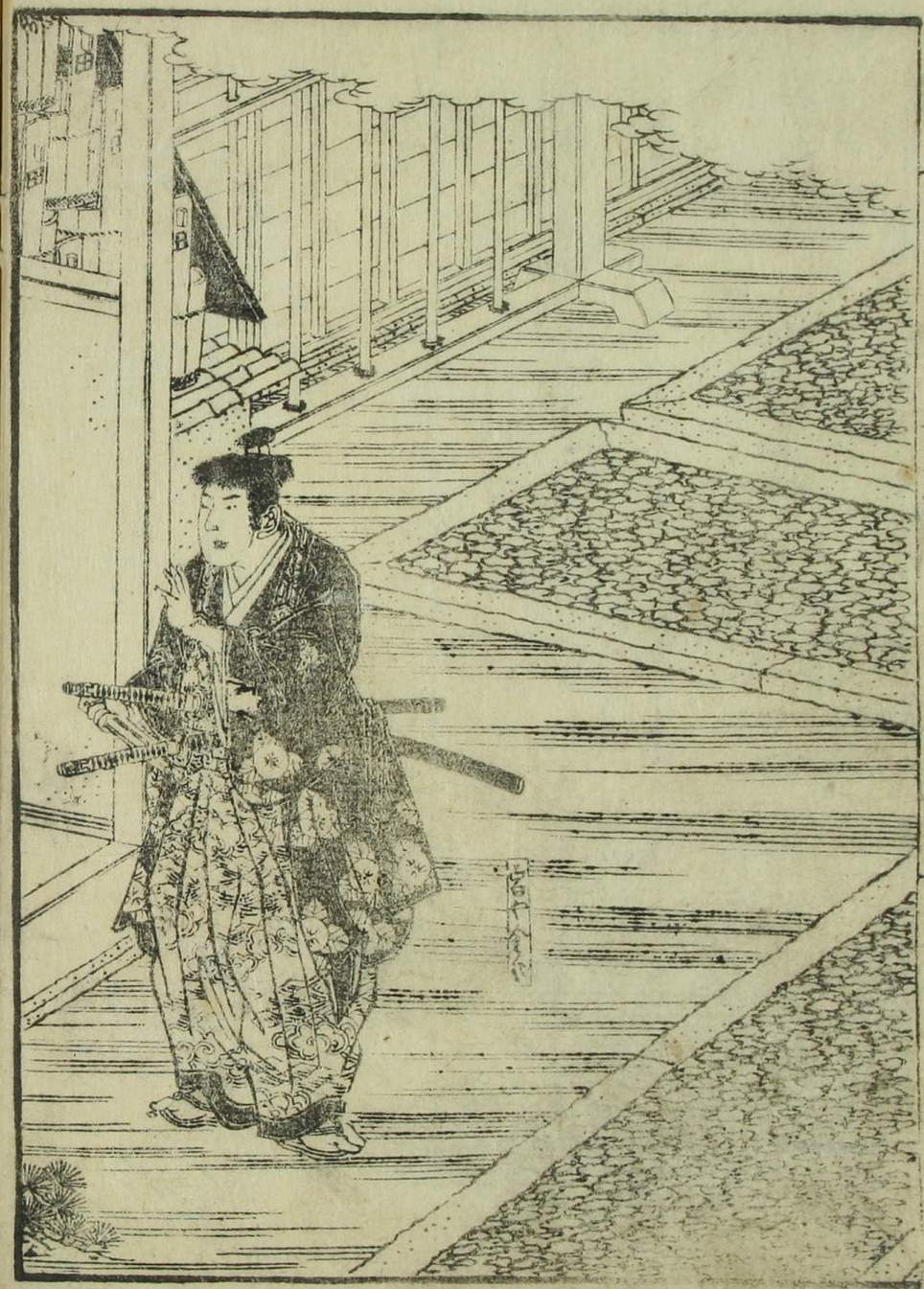
夫より公ハ筑紫權六ゞ人形画ゞ圖ゞ津を浦を迫巌義詮美あ
つなり関宿城木屋金助方へも右の人相書解あり金助大よ
驚き女房小まんとゞ呼ぶ哭ハ筑紫權六どのよ預つし我命

此度返進する時節来まり我ハ筑紫權六と名のゝく
京都へ出屋し　我御仕置みあつし　後ハかなゞく大道寺家乃
残れとも子孫の所のよいあつたゝハ我ゞ為まつせ
るゝくはかしあり我勘當ともは夫紙死ひあハ芙泉より收ゞ
此金子廿両ハ大くの大小拐盗ゝ代替置る金子あれハ返しまり
渡し伍不自由おさせまつるべしわのうふ内ハ大坂朝比奈茂之湯ゝ
よおこしうしなれば必く我よ代つく成まるとつ大坂よとべ　とつどふ敬へ
くれば女房小はんゞ欲ハ大きあゞ成ゞ一し内密の仰せのゝくあれゝ
權六ゝの伍永のゝく行乗あれしあよゝあゞ甚ゝ命の親ゝいふる
あゝ狂ゞ今暫く見合時節と待まられといひくれば金助敬あゝ者
命の親おくるあれとハ不審ゝあつて先達て我手をとゝくて陰ゝの呉

見實ふ胄身ふ通つく怠ぢくし其時一討ふ必ずとする我身ふ
出さる事あるべ詮うとあぐうべ甚く小袖大ふ孤形近給ふるる此三
の有べうば義経ふ上ぢくし敷ふ孔子もの言ぐ此度我身
の死ぢべき時孝ぢう必し給ふ如なん前我詞ふ背くまおかくば来
世永く夫婦の縁を切べしと怒りれば妙勝少はんもやうしの外し
てあうば我大坂へ立越姫君の仕方捨ぢべし柳率猛気を出べしとも
命紙金ふあてたびあまくと云ふの涙と袖ふ包こ名残おしけふ小万
い大坂さうて旅立れば金助今ハ心易しと用ふ立く京都ふ登
訛桂秋田城之助とのく公廟へ出る新其日の装束ふハ黒羽二重の
小袖ふ橋の紋付ほし黒羽二重の羽織ふほし紋と付ほ白小袖茶宇
縞ふ鍛袴の大小橋の紋付ほしと拵へ髪月代まて紙之流ふして

玄関へ通ふ取次ぐ訪入る新ハ此程ふ有く筑紫權六と申
盗賊ふ付ぐ此間御兼ふ上の仕若勇小領ふ恐入る能名無出ハ
やさふ悠然ふ宣へれば取次の侍も大ふ驚ふ其人品ふ
御觸の趣ふ違へぐるやうふ殊ふ大小紋付袖羽織ふ拵へ
なふ接ふが定紋なうれば暫ひるふ申ふんふ殿ふ伺ひるふ神妙ふ名
乗出るのうな御定法ふれを大小紋取上縄ふくべしやあうるふ右の趣ふ云
聞せるふ小ふ引出し足洗ふ奴隷の男なれば
大ふ感し盗紙ふどすぐふ人拙なうべと嘆さあんる其後同新ふもやうあう
れども黙して答へを厳しく拷問しるふ東國の者のやうある詞付れ
べうし繋ひうを西國作う東國作うの拵遠うう人遠のやうふ取法あう
れを先達て石捕しし手下の子分とり出し應對ふあうば実名

秋田の太郎



ハ志ゑ〻しと評定あり双方より石人引出し數度ふ及いりる時与之丞金助が
良沼と見て大ふ驚きたるさまなれば金助早く声とゝけ已人遠あゝいひく旦
助んと思ふなるぐうんら耶詮天の個のゞもね我あれば必ゞあり雲ふ白状しくゝろ
ろる事ふれといひれば与之丞とくゝし思案るふ関の宿蔵籠屋の亭主
なうれを先達くのゆうゞハ志る拠ハ此もの首尾の悪と報ぜんとゝるのう出
りのあんと心ゆう感心し扨く殊勝なる人うるし苔く云成程首領の俗の
通ゆて何率一旦いつまうくは命ゞ助あるせんと存ゝどるつくゞと思ひ与ゞ天の
個のうゞぐうゞ一旦いつまうゆくくも絶ゝ出れ罪の者くなうんゆと奏
まの変ようとん成わゞ紫權六よあ遠あくいと白状よ及ひれを聞人
出ぬるとの遠なしと評義あうゝく成う 近日死罪ゝを極うゝ
なん許し給る

田舎鈔之退牛尾左膳為追手上方へ登る話

ゝくゝ故谷伊兵衛ハ播津嶽城首尾ゝく取賜ひ帰国仕れば男殿の妹
び大ゝ喜ゝ歎ゝ倉橋左門と名乗者ゝ紫權六と云ふ盗賊
なるゝ時ゝ大ふ驚ゝ田舎者夫ハ其事を聞ゝ拙ハ門
ゝ云ふハ盗賊ゝ者ゝ其ゝ者ゝを見初ゝ時忘れ
ゝふ盗賊ゝ聞ゝ其ゝ者ふ打ゝ流石ハ平生つゝ名のあれば
遠ゝ懲ゝ盗賊ゝ聞ゝ心の怒ゝ業耀ふ眼のゝゝゝ
人ふゝ人ゝ動ゝ盗賊ゝ聞ゝハ行時ゝ出ゝ檀六の迫
を慕ひ悪ゝ角ゝ者ゝ聞ゝ与ひ迫ゝ風雨のゝ者ゝ夜縫ゝ出
何國ゝ者ゝ成ゝ行ゝ者ゝ聞ハ舘の騒動大ゝ成ゝ姫君ゝ
ゝハぬゝの事ゝれば荒ゝ者ゝ及大ふ怒ゝ者ゝ女ゝ外心の出ゝ

せしは権つよう仮令まむ人ともあ出せよとし牛尾左膳に仰せ付られたる牛
尾も大に迷惑なれどいかさま此者を取逃さんバ我身の大事も免れ難なし
く夫より鏡の用意し供人数多召連上がりてのがりたる小権門第一の
世の中なれバ當時執権職なる三浦家の家老なれバ道中筋そこよ変とき
馳走ありて思ふより日数重りたれバいつしか田舎を遁るるとをお忘れ頼く
城下に饗應あり金銀を遣りたるべ私欲第一の牛尾なれバ五日六日乃
逗留してはつ上京せん事とするに徳付たるよく心嬉しく三十日斗なな
ととも東海道の半するいうらに金銀を貪つてくらし旅

田舎危難に逢ふ関の小はん勇力の話

彩く田舎者夫ハ足にまかせ遥か館を抜出上がりこさして登りて旅が

室ハ若き女の独り歩行なれバ　同道なれを駕籠にて朝早く夜ハ忍
ひしさハいかにあれとも権六に逢んとする勢力なきにたどり坂の下に来
所を来る夕敷扱ふ金助ら女房小はんハ夫の言おせし夏子の事をも乱
悲しく又金助と生先をあふせでやと思ふ定先がしの遊用と懐中
きて出るが往還を人に負はれ去りしが又人まれもしあれども
なりなんと伊賀越へさしかかりたるが道に迷ひとある辻堂にてあはれ
住居なんと方へ向がんと孤格子押開き地蔵をとねかうさ風呂敷おしいて
暫しはどうたるし此時田舎者夫ハ坂の下より鈴をとりて土山へ赴んとなる
よひかるの家へといふ此論がらんと思ハ先年忠なる四郎なりと欺き
入水せし獄門の庄兵衛人ハ船越十兵衛と口論し入牢せし加
嶋長兵衛追放の後ハ諸方を関坂の下の辺へ来り住ける折しも

でありける田毎に水の澄者とえくれば紙多のかうーと怒ひ二人
目まぜしく土山へめりて伊賀海道のうく駕と舁迫一三里ばかれば初
更の比くるるの辻堂に駕とれろし田毎と出しかれで田毎に出あるとこん
ぞ人里ちかきこころ山中なりこゝに謀ーと狗子強き此前に何といふ前
世と見まこゝ女人言ばかと揃へ女は伊賀海道にて通人前よあらば
其えと女へ伴ひしへ我ホ存分よ恥み其上にて近前の飯もよ喜貴渡さん
たかへるうと呼て田毎にあそまとく膽こうて人心地もあるうくく
ゞ女人を伏拝とく我ハとうとへちくあるく出る者なれば何率武場とん
ものーなくるるよおしの美金あれば先と二人工系ーせんなれで
膽よ本海道まで送るのるれと渡ともそよ俗ひられで女人吸笑い
其の後行ハ海よ黄いたるも我ホゞりのくまるくひるど過ーー生物と美

飯せん我くくと庄ゝ清田毎ゞ手紙ゝれハ長兵清引退汐紙さー置
先へ戯るこ我ー作脇いこー我此者ホ相對しく始駕とりこさまゞ我こ
先多ーく耳よあるこひと儒ホあるく呼長ゝ田毎ゞ心頃日と二浦家の
姫君と多くのひとあるーづれかるよ乞史人の如きものよ紙と曲まるんや
とあるひよ呼びれるる只山麓かるーづく答るりのもあゞ女人い
打笑ひ何程母ひ初ふるる人里ゝるゝ辻堂ゝれで夜明とハ我ホ
飯み拙なる強ぐ事なるれ叔庄ゝ清ゝひるハきるゝ前とるるく一二ゝ
定むべーとかくの本と拵へく長短の闘と拵へ長と先と定めるれと
長ゝ清も迅ーと女人ゝるるホ庄ゝ清長ゝ紙ー勝るれをいざや我く
松とるーー給へとちのゞまとれで飯ゝ
ちくるよ女人もてあゝー飯今ゝ汐ゞくくくハ堕ふまーと

源氏物語玉鬘巻之四
十五

夫手と押へよと懐剣をぬきうち長清ゆうくみき
立ちあし前と振捨てさし押宛小はん立出まろ庄司清と三三郎投のけ
是いしくうち長清と其の嘗てくくよのそろ世田毎と汗紅しく多数か
世田毎ハ夢の心地しく怪事思つかし其間よ庄司清紀重ろ己の男か
きハ我くくの高貴の邪ナ ひろぐとむちやぐう件をひつぐろし 数十丈の谷
底へ投落し 扨田毎ふいひくくハ若き女の下人いうあり 況て上ろへ出ろハ
ぞや包まぐ抜流ぬ我ろ上ろへ出ろりのれべ彼く力くあり 使ハ乗人
と和毋しくくひけるふ田毎も獄士ゆく地花ろよ逢ねろ心地しく和ら
上方のものあるが猛金く使出されやくくあさ分くハ姫伝れく能業
檀氏といふ人城尺初鉢と思ひ出を人のひ糸を弱伝べ扨伝
住ちきび扨ち左猛えあ檀ふいくいふ人ハ乗ま婦ら悪人

ひく我ろ人の事うて上方へのあるものあうん易うれ君の力よく
ありてを人を易逢せ乗くせんといと教毋しくうけ乗ひれハ田
毎ハ姫ーき涙ぬく何ら君の所情と教み乗くもろくて手速上方
へのうろと久る支ろう大坂へ来ろ者く性伝くし和比素の義文
所易ら義文へ姫義ふ妻て義畑と易ら不今ら船越十丈の
時くて乗清くし清十郎ともいあよくあるよう 扨伝ぬくハふまんも時
きうび主君の所乗ハ多くの人くカくあくのくハ人歩くし和文今易
能業檀六義の息の為ふ自檀六くて義ハ乗ハ歩ま人れで与ら
ふ迎く住重もあぐくしくくハ文ま文同く道の刑と扨られ人志ふれ
姫君の所事文の教毋くくまてハふぐくへ伝ひふと一日をふく文く
同罪ふあうたくひ又ハ女中ハ能業檀六及城義嘉ひうぬくと義雅

後として此頃迫使ひ来りし何車檜六夏のあり取次ぎ送
り届けられと報ぜられた義金蔵も感心して然わと檜六の事ら
[illegible]これも思ひ為られた人々引合せ有数を伺送り届
ん先生文をも其報ヤべしと懇よ言られを小まんハ呼び今ハ
世を思ひ残ぬ事も仕ず終へ一日も早く京へ発船いたんと夏子
毎の引とも神ぬうちまし出行事

浪花侠夫傳巻之四畢